（研究論文）

投動作をともなう運動あそびの発達的検討

塩田　桃子 *

要約

幼児期において、運動文化（運動あそび）の継承・発展に関する科学を教えるためには、発達のすじ道を押さえた教材を選択し、その内容、方法が吟味されなければならない。本研究は、その示唆を得るために、投動作をともなう運動あそびの実践を行い、子どもの言動から年齢ごとの発達的特徴を明らかにすることが目的である。対象児は、3歳児と4歳児である。投動作をともなう運動あそびに着目した理由は、走動作・跳動作と違って、意図的に学習しないとなかなか身につけることが困難であると言われているからである。分析方法は、各年齢、観察した2日間のビデオから、幼児の言動を記録に起こした。そして、各年齢について発達的特徴が見られたと判断した場面をいくつか抽出した。その結果、3歳児に比べ4歳児においては、友だちとのやりとりが多かったこと、投動作の変容が多かったことが観察された。

キーワード：　投動作　運動あそび　運動文化　発達

2007年10月17日受領（教育研究）

1．問題と目的

1.1.　なぜ運動あそびをするのか

自由保育時間において、園庭であそぶ子どもを観察してみると、縄跳びをしたり、鉄棒や雲梯にぶら下がったり、木に登ったりするなどのあそびを行っている。このような子どもの姿から、子どもは本来、運動あそびが大好きであることが見てとれる。秋葉は、これまでの子どもの研究の成果を踏まえて、「子どもは四六時中、身体を動かさずにはおれない存在だ（能動的存在）[1]」と述べ、その根拠を「感覚・手（指）・足・口と頭の生長相関の法則、いわゆる“つきでた大脳”をみがき、かしこさをわが身に宿そうとする懸命な努力のあらわれである」としている。また、丹下は「人間の本質的なものに、運動欲求がある[2]」と言う。人間は生を受け、その後、外界に働きかけながら首が座り、寝返り、ハイハイ、つかまり立ち、歩行という一連の発達を遂げていく。そこには、自由に動きたいという欲求に支えられながら移動の技術を獲得していくのである。そして、自由を獲得した子どもは、あそびの中で走ったり、跳んだり、投げたりする。これが人間の生物的な運動欲求である。しかし、子どもはそれだけでは満足しない。「もっと早く走りたい」「もっと高く跳んでみたい」「もっと遠くへ投げてみたい」「もっと上手になりたい」という欲求をもっている。このような欲求は、生物的な運動欲求に支えられて生み出されるのである。その結果、運動の技術的な面白さ、魅力を知り、技術の上達を目指していくのである。四歳児や五歳児は、側転や竹馬などの回転感覚やバランス感覚が要求される技に挑戦したり、おにごっこなどのルールをともなうあそびを楽しんだりする。それは、生物的な運動欲求に支えられて、技術の上達を求める姿なのである。

ところが、このような人間の本来もつ欲求が十分に満たされない社会的状況がある。これは、あそび場の減少やテレビゲームを代表とする室内あそびの流行などから言える。誰もがいつでも人間的な運動欲求を満たし得る状況に置かれているかを問い直す必要があるのではないだろうか。特に、幼児期においては、基礎

* 大阪健康福祉短期大学
〒590-0014 堺市堺区田出井町2-8
大阪健康福祉短期大学　子ども福祉学科
e-mail: momo@kenko-fukushi.ac.jp

的な運動パターン（「走」「跳」「投」「蹴」など）を獲得する「最適期[3]」だからである。この時期に、楽しい運動あそびを存分に味わい、「もっと○○したい」「もっと上手になりたい」という気持ちを膨らませることが、運動文化を享受し、結果として、基礎的な運動パターンを獲得することになる。

1.2. なぜ投動作なのか

そこで、本稿では、基礎的な運動パターンの一つである「投動作」に着目する。その理由は、以下に記す。近年の幼児体育研究を概観すると、主として幼児期の体力・運動能力の横断的、縦断的変化や男女の性差、運動能力テストの信頼性や妥当性などの研究が多くを占めている。特に、体力低下が問題視される今日に至っては、体力・運動能力テストによる基礎的な運動能力の測定結果を用いた研究が多く存在する。それらの研究の結果を見ると、特に投能力[4]は他の能力に比べ性差が大きく、加齢にともなってその差は拡大している。その原因は、個々の学習経験の量によるもので、遺伝による内的要因より環境による外的要因の影響が大きいことが双生児研究によって明らかにされている（豊島ら：1982・1983）。ヒトの投動作の出現は乳児期に手を掴んだものを放出すること（「偶然の手放し」）に始まると言われる。「まりを投げると投げ返す」という課題は15ヶ月児になるとできるようになる。その後、２歳頃から加齢につれて投動作は変容し、６歳を過ぎればほぼ成熟型に達する（宮丸：1980）。性差においては、３歳頃から現れ、年齢が進むにつれて次第に明確になるという。

走動作・跳動作と違って、意図的に学習しないとなかなか身につけることが困難であると言わる投動作に着目し、投動作の性差が現れる３歳児と４歳児を対象に、投動作を伴う運動あそびの実践を行うことにする。

1.3. 本研究の目的

投動作を伴う運動あそびは多く存在する。ボールを使った運動あそびはその多くが投動作をともなった動きである。しかし、本実践は、いつでも気軽に安全に使用できるもので、なおかつ身近な素材で簡単に作ることができるおもちゃを用いることにした。4種類の手作りおもちゃを用いた運動あそびをそれぞれ2回ずつ、計8回に渡って実践を行った。4種類の運動あそび[5]をさらに、「単に投げることを体験させる運動あそび[6]」と「投げることの体験に加えごっこの世界をとり入れた運動あそび[7]」の２つに分類した。本研究は、４種類の運動あそびの中から、特に筆者が「おもしろい」と感じた新聞棒を用いた運動あそびに着目することにした。「おもしろい」中身とは、一つは、ごっこ[8]の世界をとりいれているところにある。現実と虚構を行き来する４歳児らしさが映し出されているところに「おもしろさ」を感じたのである。そして、その世界でワクワク・ドキドキする子どもが、投動作をともなう運動あそびのなかで主体的な活動となって現れているところにもうひとつの「おもしろさ」があった。この「おもしろさ」が3歳児と4歳児の発達的傾向として顕著に現れていたのである。したがって、本稿は、新聞棒を用いた運動あそびを行う子どもの姿から、３歳児と4歳児の比較を行うことにより発達的特徴を明らかにすることが目的である。ここでは、特に動作の変容や友だちとのやりとりに焦点をあてた。

２．方法

2.1. 観察期間・研究協力者・観察方法

2007年3月の1か月間、大阪府の某保育園に在籍する3歳児18名（男児：９名、女児９名；観察開始時平均年齢4.4歳；レンジ3.9歳－4.8歳）と4歳児18名（男児：９名、女児９名；観察開始時平均年齢5.3歳；レンジ4.9歳－5.8歳）が運動あそびをする様子を、ビデオカメラで記録した。観察日数は各年齢2日間（1回につき1.0時間～1.5時間）である。幼児にとって日常に近い状態で行えるようクラスの担当保育者が運動あそびの実践を行った。３歳児クラスは２人担任（リーダーをとる保育者Ａとサブリーダーをとる保育者Ｂ）、4歳児クラスは1人担任（保育者Ｃ）であった。３歳児の１回目においては、担当保育者Ａがお休みだったため、急遽、4歳児クラスの担当保育者Ｃが行うことになった。なお、保育園および保護者には研究の概要を説明したうえで、本研究への協力を依頼し、承諾を得た。運動あそびの内容においては保育者と、事前に打ち合わせを行った。子ども一人ひとりの状況、クラスの状況等をお聞きし、その実態に合った保育を進めて頂くようにお願いをした。運動あそびで使用する教材（新聞棒）の説明を行った。教材（新聞棒）の製作については、子どもが「自分のもの」として大切に使用できるように、可能な範囲で子どもに作ってもらう

ようにお願いした。保育計画および環境構成については、子どもの実態に合わせて行えるよう、保育者にお任せした。

2.2. 分析方法

各年齢、観察した2日間のビデオから、幼児の言動を記録に起こした。そして、各年齢について発達的特徴が見られたと判断した場面をいくつか抽出した。分析は、3歳児と4歳児の比較を事例を通して行った。本文中の子ども・保育者の名前は仮名である。

3. 結果と考察

3.1. 事例検討と考察

3.1.1. 3歳児

【1回目】※下線部は発達的特徴と考えられる部分である。

(1) 新聞棒づくり

保育者がエルマー[9]から贈られてきた新聞棒（未完成の棒が人数分）を子どもに提示する。そして、保育者が、作り方を説明し、製作が開始する。りゅうすけは、それを杖に見立てて腰を曲げながら「わしはおじじだぞ～」「わしはおばばだぞ～」と言ってあそんでいる①。りんは、嬉しそうに部屋を歩き回っている。たろうは、新聞棒の筒の真ん中を覗き込んでいる②。しょうたは股に挟んで小走りをしている③。こずえは、角に見立てたのか新聞棒を頭の上にのせている④。2～5名で新聞棒を振り回し、たたかいごっこをする姿もある⑤。全員が出来上がったところで保育者が、子どもを集めエルマーにお礼を言いに行こうと提案する。

（考察・解釈）

①②③④新聞棒を杖やほうき、望遠鏡、角などに見立ててあそんでいる。

⑤子ども数名でごっこあそびを行っている。

(2) 探検

エルマー探検が始まる。「エルマー！」と呼びながら各保育室を回る。5歳児クラスの保育室にある倉庫の前で、保育者がここにいるのかもしれないと言って、倉庫を開ける。すると、子どもは恐る恐る倉庫に近寄る。子どものなかには、恐がって遠ざかる子どももいる①。「エルマー」と呼びながら倉庫のなかを覗いて、いないことを確認すると、「おらんな～！」と安心した表情で、次の場所へと移る。園内にはいないことがわかると、次は隣にある短大の体育館へ移動する。体育館へ向かう途中にある柵のドアが半開きになっているのを見て、保育者が「エルマーがとおったんちゃう？」と言うと、子どもは静まりかえり緊張感が漂う②。次に、保育者は、電気が付いている体育館のドアの小窓を指差して、「でんきついてるねん。みてみて！」と言うと、また、子どもは静まり返る。

（考察・解釈）

①②ごっこの世界に入り込んでいる様子。

(3) 投動作をともなう運動あそび

体育館の中に入っていく子どもは、猛獣の絵が描かれている的を見つけ、「や～！」「わ～！」と叫びながら的に向かって走っていく。保育者が、的から少し離れた位置に立ち、的に向けて新聞棒を投げて見せる。それを見て、子どもは的に向けて新聞棒を投げ始める。的に当てると「やったー！」と大喜びしている。この時、子どもはいろんな位置から自分のタイミングで自由に投げてあそんでいる①。すると、保育者が的から3mほど離れたところに引かれた線から投げるように指示する。そして、先頭の子どもを指名して、その後ろに並ぶように伝え、投げ終わったら一番後ろに並ぶように伝える。子どもは、順番交代で的あてを行う。開始直後は、線の上から投げるが、保育者がいない列の的においては、徐々に前に位置取り、的のすぐ目の前で投げる②。保育者が並んでいる的の列は、決められた位置から投げている。的を倒すことに成功した子どもは、「やったー！」と言って大喜びをするが、倒れた的を元の位置（台の上）に戻す姿はほとんど見られなかった④。この時、的に描かれている猛獣の色[10]にこだわる子どもの姿がある。たくみは、「みずいろして～みずいろ～」と言って、的の絵が水色ベースに塗られた面を正面に向けるように友だちに言う。ことねもまた、倒れた的を保育者が立てたところ、正面にくる絵が緑色だったため「みずいろ～」と言って、的の向きを変えるように言う。めいが倒した的をりえが「つぎはみどりね～」と言いながら台の上に置こうとすると、めいが「あおがいい～」と言う。するとりえは、「あおがいい？」と聞き返し、的の向きを水色が正面になるように変える。色を意識していると思われる場面が観察された⑤。

友だちが的を倒した時に、いっしょに喜ぶ姿が見られた。しょうが的を倒すと、りえとももかが「やった

ー！」と喜びながら的を台の上に乗せる⑥。的あてあそびが飽きてきたのか、違うあそびを始める姿が見られた。たかは何もないところへ向けて投げる。たろうは、新聞棒を上に投げ上げ、くるくると回転させてあそんでいる。なおしは、上に向けて新聞棒を投げている。みくは、新聞棒を股に挟んで走り回っている⑦他のあそびをする子どもが増えてくると、保育者は、子どもを集める。するとりゅうすけが、「エルマーな～○○こうおえん（保育園の前にある公園の名称）におるとおもう～」と言い出す⑧。保育者が公園に行ってみようと提案すると、子どもは勢いよく走り出し体育館を後にする。

（考察・解釈）

①子どものなかで、自然に的あてを始めている。ごっこの世界に入っているということも影響しているとも考えられる。

②決められた位置から投げるというルールは子どもだけでは難しいと考えられる。

③保育者の支えがあれば、ルールを守ることができると考えられる。

④友だち同士であそんだり、会話をしたりする姿があるものの、周りの状況を見て、元の状況に戻すことはしない。

⑤色の名前がわかるようになると、それへのこだわりもでてくると考えられる。

⑥友だちの喜びを自分のことのように嬉しがる姿が伺える。

⑦的あてだけでなく、物を操作することそのものを楽しんでいる様子である。

⑧想像を膨らませ、それを友だちに伝えようとする姿が見られる。

（4）探検

公園に着くと走り出し「エルマー！」と叫ぶ。りゅうすけは、散歩中の犬に向かって「エルマーさっきおった？」と尋ねる。かつやも「エルマーみましたか？」と尋ねる。すると、なおしは「エルマーかくれんぼしてるんちゃう？」。りえは、「まいごになったんかも」①。いろんな意見が飛び交うなか、保育者は、エルマーにお礼の手紙を書くことを提案する。子どもは「う～ん！」と頷いて、保育園へ戻る。

（考察・解釈）

①想像を膨らませ、それを友だちに伝えようとする姿が見られる。

【2回目】

（1）探検

1回目で使用した新聞棒が手渡された子どもは、新聞棒をいろんなものに見立ててあそぶ姿が見られた。ほうきに見立てて床を掃くふりをしたり、ちょんまげに見立てて頭の上にのせたり、杖に見立てて老人のふりをしたりしている①。そして、前回同様、エルマー探検に出発する。各保育室を回り、エルマーがいないことを確認すると、次は公園へ出かける。公園に着くと保育者Bがいないことに気づく。保育者Aが、「ねえねえ、きりんぐみさん。そういえばにしかわせんせいは？」と子どもに問いかける。全員、心配そうな表情になる。ゆうたろうが「かくれたんだ～ここに」と言うと、りゅうすけが、「ちゃうで～おいてってんで～」と応える。「たべられてんで～」、「はんにんがたべたんちゃう？」といろいろな意見が飛び交う。エルマー探しから保育者B探しに変わる。「にしかわせんせ～い」と叫びながら探し回る。すると、らいおん王様からの手紙を発見する。体育館へ来いと書かれた手紙を保育者Aが子どもに読むと、かつやが「らいおんにたべられてしまう。にしおせんせいが。」と言い出す。みくも、心配そうな表情で「たいじょうぶかな～。しんぱいになる～」と筆者に言う②。

（考察・解釈）

①1回目と同様に見立てあそびを行っている。

②1回目と同様にごっこの世界に入り込んでいる様子。

（2）投動作をともなう運動あそび

体育館へ移動し、中へ入ると、にしかわせんせいが待っている。ことねは、興奮気味に「にしかわせんせ～い」と言って抱きつきに行く。そして、前回同様、的あてを始める。この時、3ヵ所に置かれた的の前にそれぞれ一列ずつに分かれて並んでいる。しかし、投げる位置は的の目の前である。それに気づいた保育者Aは子どもを集め、投げる位置を確認する。そして、的あてあそびを開始する。何度も何度も投げては順番に並ぶ子ども。運動を得意とするたくみ・なおし・あきお・たかを除くと、ほとんどの子どもが的に当たりはするが、倒れることが少ない。しかし、保育者の励ましを支えにしながら、何度も繰り返しあそんでいる。的が倒れた時は、「やったー！」と言って大喜びする

姿が見られる。次に、保育者は遠くへ投げるあそびをしようと提案する。投げる位置から的までの距離を長くする。たくみが見本として投げる。その後、また、全員で順番に並び的あてを始める。的までの距離が長いため、的を当てることができたのは、線を無視して投げている子どもだけであった。しかし、何度も何度も挑戦する姿が見られた①。保育者は子どもが投げるたびに、「○○ちゃん、おしいなあ」とか「○○ちゃん、もうちょっとで当たるよ～」と励ましている。的あてを終えると、保育者Aは保育者Bにらいおん様がどこへ逃げたかを聞く。保育者Bが「(保育者Bを) とじこめてどっかいってん」と応えると、子どもは不安げな表情をする。そして、保育者Aがもう一度、公園へ探しに行こうと提案し、公園へ向かう。

(考察・解釈)

①的までの距離が長いため、新聞棒を投げても届きそうにない。しかし、保育者の支えがあることによってあきらめずに挑戦する姿になったと考えられる。

(3) 探検

公園へ到着すると、「らいおんさ～ん！」と大声で叫びながら探し回る。すると、たろうが手紙を発見する。「あ！エルマーの！！」と叫ぶと、みんながたろうのところへ集まる。保育者が手紙を読む。らいおん王様が逃げていったということがわかると、「やったー！」と大喜びをしてバンザイをしている。また、新聞棒を高々と上げて喜んでいる姿も見られる。その後、保育園に戻ると、りん・りえ・たくみ・なおしは事務所に行き、他の保育者に「らいおんおうさまやっつけてん！」と少し興奮しながら報告する姿が見られた。

【投動作の変容】

3歳児における投動作は以下のように観察された。(「⇒」は1回目の実践から2回目の実践に移ることを意味する)

たくみ：左足前右手投げ⇒左足前右手投げ
あきひろ：左足前右手投げ⇒右足前右手投げ→左足前右手投げ
しょう：左足前右手投げ⇒左足前右手投げ
なおし：右足前右手投げ→左足前右手投げ→右足前右手投げ⇒右足前右手投げ→右足前左手投げ
かつや：右足前右手投げ⇒右足前右手投げ
めい：左足前右手投げ⇒左足前右手投げ
りゅうすけ：左足前右手投げ⇒左足前右手投げ
ももえ：左足前右手投げ⇒左足前右手投げ
ことね：右足前右手投げ⇒右足前右手投げ
りん：右足前右手投げ⇒？（観察不可）
たか：左足前右手投げ⇒左足前右手投げ
こずえ：左足前右手投げ⇒右足前右手投げ
たろう：左足前右手投げ（左手で棒を支えて持つ）⇒左足前右手投げ
みく：右足前右手投げ⇒右足前右手投げ
りえ：左足前右手投げ（左手で棒を支えて持つ）⇒左足前右手投げ（左手で棒を支える）
ゆうたろう：休み⇒左足前右手投げ（左手で棒を支える）

【用語と解説】
・右足前右手投げ：左足より右足を前に置いて右手で投げる
・右足前左手投げ：左足より右足を前に置いて左手で投げる
・左足前右手投げ：右足より左足を前に置いて右手で投げる
・左足前左手投げ：右足より左足を前に置いて左手で投げる
※投げる手の側と前に置く足の側が異なる動作（右足前左手投げ・左足前右手投げ）の方が、成熟されていると言われている。

3歳児における投動作の変容を1回目と2回目の比較によって行った。なおしだけが、右手で投げたり、左手で投げたりしており、また、手と同側の足を前に出して投げたり、それとは逆に手と同側の足を前に出して投げたりしていた。あきひろは、出す側の足を変えることはあるものの、投げる手は変わらなかった。それ以外の子どもは、1回目と2回目において、投げる側の手と出す側の足が同じであった。すなわち、1回目と2回目が、ほぼ同じ動作であったということである。

3歳児において、保育者は見本を見せるという方法を取り入れている。その際、見本となる友だちをじっと見つめる子どもの姿があった。3歳児というのは、細かな形を捉えることができる段階でもあるので、見

本となる友だちの細かな動きをしっかりと捉えているように見えた。

3.1.2.　4歳児

【1回目】

(1) 新聞棒づくり

保育者がしっぽマン[11]から贈られてきた新聞棒（見本が1本、未完成の棒が人数分）を子どもに提示する。子どもは興味津々の表情で保育者のところへ集まり、「まほうつかいのほうき～」と言いながらその棒が何なのかを考えている様子。見本を見た後、未完成の新聞棒が手渡され、見本通りになる作り方をグループごとに分かれて考え、製作を行う。この時、りゅうじは未完成の棒を杖に見立てて腰を曲げながら歩いたり、ゆういちは、ほうきに見立てているのか新聞棒を股に挟んでジャンプしたりしている①。グループに分かれて製作が始まると、ゆういちはまこに「まこ、どうやってやんの？」と聞きながら、自分の考えた作り方をまこに見せる。まこは自分の新聞棒を作りながらゆういちの作り方を見て、「あ～、そうちがう～」と言って、また自分の新聞棒を作り始める。そして、まこは新聞棒の本体に房の部分をテープで貼り付ける段階で、だいきに本体を差し出して「だいき、もって～（持って）」と頼む。まこに新聞棒を持たされただいきは、それを右手で持っているが、目と左手は自分の新聞棒に向いている②。その間に、保育者に援助してもらっていたゆういちの新聞棒が完成した。ゆういちは、「できたぞっ」と言って、嬉しそうな表情で、新聞棒を股に挟み、部屋中を走りながらジャンプして、友だちに見せ回っている③。まこは、なかなかうまくできず、「せんせい、てつだって～」「だいきくん、てつだって～」と言って、助けを求めている④。保育者がまこの援助をする。まこが出来上がると、他のグループであるりゅうじのところへ行き、「できた、りゅうじ～」と報告する。そして、ゆういち同様に、股に挟んでジャンプしてあそんでいる⑤。まさしも保育者の援助のもとで、出来上がると「できた～！」と大喜びしながらスキップをしたり、部屋を走り回ったりしている⑥。そして、自分のグループのところへ戻り、「おしえたろか～」と言う⑦。保育者が出来上がった子どもにゴミの片付けと箱いすを元の位置へもどすように指示すると、まこは片づけを始め、箱いすを運びながらりゅうじグループに向かって「おしえたるわ～」と言う⑧。全員が出来上がると、次はそれを持って散歩へ出かける。

（考察・解釈）

子ども同士で教えあう姿、できた喜びを友だちと共有しようとする姿が特徴的であった。

①3歳児と同様に新聞棒を杖やほうきに見立ててあそんでいる。

②④⑦⑧子ども同士で教えあったり、援助を求めたりする関係性が見られる。また、まこの言動を見ると、自分の新聞棒を作りながらゆういちの援助に対して反応している。これは、二つのことに注意を向けることができるようになっていることが伺える。

③⑤できた喜びを友だちに伝えようとする姿が見られる。

⑥できた喜びを全身で表現する姿が見られる。

(2) 探検

保育室から保育園の玄関へ向かう途中、そうたが階段のところで新聞棒をほうきに見立てて、一段一段を掃いている。それを見たしゅんやもそうたと同じように、階段を掃くふりをしてあそんでいる。後からきたゆういちもまた、同じように掃くふりをする。そして、しゅうやとゆういちは二人で「そうじ～そうじ～」と言って楽しそうにあそんでいる①。

保育園の目の前にあるＳ公園へ行く。1mほどの高さの段の上に一列に並んで、新聞棒を股に挟んでいる。保育者が「いっせ～の～でっ」と叫ぶと、子どもはそのタイミングに合わせて一斉にジャンプして飛び降りる。すると、すぐに子どもは、また段の上に登り、個々ばらばらにジャンプしながら飛び降りることを楽しんでいる。この時、りゅうじとみか、りこは「いっせ～の～でっ」と声をそろえて叫び、同じタイミングでジャンプしていた②。次に、りゅうじは、飛び降りる位置から5mほど後ろに下がって、走り込んできてジャンプする③。何度も繰り返しあそんでいる子どもたちに向かって、保育者が「じゃあ、みんなにまほうをかけてあげる」と言って、新聞棒を大きく回しながら「ちちんぷいぷい～たくさんとべるようにな～れっ」と言う。すると、そうたが「よしもとせんせ～、・・・にな～れっ」と言い返す④。最後に全員が揃って、一斉に走りこんでのジャンプをすることになる。ゆういいちの「ごう、よん、さん、に、いち」の掛け声に合わせて、一斉に走り出し段の上から勢いよくジャンプをする⑤。次に、体育館へ移動する。体育館の前に着く

と保育者が体育館のドアの小窓を覗き込み、「いや～っ」と言って、何かいつもとは違う様相であるという雰囲気を漂わせる。子どもは、早く体育館の中を見てみたいという気持ちからか、新聞棒をドアに向けたり、「どあをあ～けろっ」と言ったりしている⑥。

（考察・解釈）

①友だちが見立てあそびをしている行動を模倣し、一緒にあそんでいる。また、ほうきに見立てて掃くという行動において、階段の隅から隅まで丁寧に掃いている姿から、3歳児に比べて母親になりきっているようにも伺えた。

②子ども同士であそぶ姿が見られた。

③跳躍運動のあそびを発展させている。

④保育者の言ったことばを模倣して言い返すが、その中の一語を違うことばに代えている。

⑤友だちの掛け声に合わせてながら、みんなと一緒にタイミングを合わせて走り出ている。

⑥新聞棒を魔法のほうきに見立てて、魔法を使うふりをしている。ごっこというイメージの世界をみんなで共有していることも見てとれる。

(3) 投動作をともなう運動あそび

体育館の中へ入るとさる、くま、らいおんの絵が描かれている3つの段ボールの的[12]を見つける。子どもは一斉に的へ向かって走り出し、それぞれ3ヵ所に分かれ、新聞棒で的を叩くようして倒し、大喜びをしている。すると、体育館に置かれているホワイトボードを見つけた、りこ、ゆうじ、まこは、何が書かれているかを話し合っている[13]。ゆうじは、「みんなきて～」とみんなを呼ぶ①。保育者は、ホワイトボードに書かれていることを次のように話した。「わ～はっはっはっは～。おれさまはらいおんさまとごりらさまとくまさまだ！くやしかったらおれたちをたおしてみろ。ただし、これで『や～！』といってたたくのはやめてくれ」。そして、保育者が、「しっぽマンがこれ（新聞棒）でたおせってことちゃう？」「どうやったらたたかんと（叩かずに）たおせるとおもう？」と聞くと、そうたが投げる動作をして見せながら「なげるん？」と言う。このやりとりをしている時、まさしは、「せんせい、いまなんかとおった」と言う②。保育者は、りこを指名して、どう倒すのかをやってみせるように言う（見本の提示）。りこは、嬉しそうな表情で的に向かって新聞棒を投げる。子どもたちは、的のところへ走っていき、的あてあそびを始める。子どもは、的の前に一列に並び、順番に投げては最後尾に並ぶ。的が倒れた時は、投げた子どもが倒れた的を台の上に乗せて、元の状態にする③。保育者は、的から5mほど離れた位置に引かれた線から投げるように指示する。子どもは指示された線に立ち、新聞棒を投げてあそぶ。だいきは、保育者が的を倒すのを見て、「うわ～！やった～！よしもとせんせ～」と言って足をばたばたさせて大喜びをする④。ゆうじは、あそびの途中で保育者のところへ駆け寄り「なんか、つのみえた」と言う⑤。次に、みかが次のあそびをみんなに提案する。「あんな～みんながな～あんな～ぜんぶな～らいおんとかな～あんな～たおせたらな～あんな～あそこ（舞台の上）みんなのって（みんなが乗って）な～あんな～いっせーのーででな～ジャンプしよう！」と言うとみか以外の子どもが声をそろえて「い～よ～」と応える⑥。そして、新聞棒の的あてあそびが再開する。的をすべて倒しただいきは「できたぞ～！」と言って舞台へ走る。また、ゆうじは、「ぜんぶおわったぞ～！」と言いながら勢いよく舞台へ向かって走っていく。的をすべて倒した子どもは、舞台に上で待機する。全員が的を倒し終えると、次は舞台の上から全員で一斉にジャンプして飛び降り、そこから体育館の端まで走って行き、実践が終了する。

（考察・解釈）

①ごっこの世界に入りこんでいる様子。自分が発見したことをみんなに伝える姿が見られた。

②⑤ごっこの世界にいる子どもには、空想のものが現実に見えるようである。

③自然に順番交代や的を倒したら自分で元の位置へ戻すというルールが作られている。

④他者の喜びが自分の喜びとなっていることが伺える。

⑥既存のルールを作り変えて、違うあそびを創造し、友だちに提案するという主体的な活動になっている。それに対して、快く賛同する子どもの姿が見られた。

【2回目】

(1) 新聞棒づくり

1回目と同じ新聞棒を使用するが、房の部分の取替えから始まる。取替えを終えたみすずは、ほうきに見立てて床を掃く。それに続いてまこも、新聞棒を股に挟んで嬉しそうにジャンプをしている。あゆかも、そ

れを見て新聞棒を股に挟みジャンプをする。ゆうじは、筆者に向かって「ちちんぷいぷい～、おにになれっ！」と言いに来る。それを見た他の子どもが、筆者に近づいてきて、「ちちんぷいぷい～」の次に、「はんにん」、「きりん」、「ゆき（雪）」、「ちゅうしゃ（注射）」、「らいおん」など、次々と言いに来る①。全員ができあがったところで、保育者が「きょうもれんしゅうしにいく？」と散歩に誘い、次にからだを使った歌あそびである「猛獣狩りにいこうよ」を始める。「猛獣狩りにいこうよ」あそびを終えると、保育者は子どもに向かって、「ちちんぷいぷい～、おさんぽへいくとき、いつもならんでいるところ（保育園の玄関口のこと）へ、い～けっ！」と言うと、子どもはすごい勢いで保育室を飛び出し、玄関へ向かって走っていく②。

（考察・解釈）

①他者の行為の模倣を行うと共に、過去に行ったあそびを想起してあそんでいる。

②次に楽しいことが待っているという期待と共に、そのあそびの見通しがもてているように思われる。

(2) 探検

玄関のドアに魔女からの手紙が張ってあることに気づいた子ども。まこが手紙を保育者に渡して、読んでもらう。子どもは、興味津々の表情で手紙を読む保育者に聞き入る。手紙を読み終えた保育者は、獲物を取りに行こうと子どもを誘う。その時、まさしは、「えものさがしてけえへんかったら（探してこれなかったら）まほうかけられる～！」と言うと、まこが「えものつかまえな、こうもりにたべられるんちゃうん？」と言う①。保育園を後にして保育者が短大へ行こうと提案する。短大へ向かう途中、ゆうじは興奮気味に友だちに「まじょが･･･」と話しかけている②。そして、体育館の柵の前を通った時、「このなかにまじょおるんちゃう？」と保育者に話しかける。まさしは、道端で虫の死骸を見つけ、「せんせい、えものおる！」と叫ぶ。りゅうじは、短大へ通じるドアに物干しがかかっているのを見て、「まじょのしわざちゃう？」と言う。しゅんやは、いつもはそのドアに鍵がかかっているのに、それがかかっていないことに気づき「あっ！あいてる～！」とみんなに伝える。すると、しゅんや以外の子どもが「あいてる！」と不思議そうな表情で、保育者にそのことを伝える。保育者がドアを開けるが、子どもはそこから入ろうとしない。保育者が、前へ進むように促すと、子どもは恐る恐る短大のグラウンドに通じる通路を歩いていく③。

（考察・解釈）

①ごっこの世界で想像を膨らませていることが伺える。

②友だちとイメージの世界を共有していると考えれらる会話をしている。

③ごっこの世界に入るとすべての事象が不思議な世界になるようである。

(3) 投動作をともなう運動あそび

グラウンドへ着くと、そこには、1回目と同じ的が置かれている。保育者は「なあなあ、もしかして、あれ（的）をしとめてかえったら、まじょにまほうをかけられへんかなあ？」と子どもに聞く。それに対してまこは、「でも、これ、だんぼーるやもん」と少し苦笑いをしながら言う①。そして、再度「猛獣狩りにいこう」を行う。子どもは、大声で張り切った様子で「猛獣狩りにいこうよ」を行っている。その時、そうたは、少し元気がない様子である②。実践の2回目においては3グループ（らいおんG・くまG・さるG）に分かれて行う。はじめは、子ども自身が投げる位置を決め、一列に並んで順番交代で行う。自分たちで投げる位置に線を引いているグループも出てくる③。少し経ってから、保育者が的を中心とする円を描く。すると子どもは的を囲むようにして円の線上に立つ。くまGは「いっせ～の～でっ！」と声を揃えて一斉に投げる。それに気づいたらいおんGの子どもが「みんなでいっしょにしよう」「そうしよう」と言い始める。さるGも同様に真似る。その方法で何度も何度も繰り返しあそんでいる④。すると、しゅんやが的に着いていた赤いしみ（マジックインキが偶然ついてしまった跡）のようなものを見つけ、「あっ！あかいのなんかついてある」と言い出す。これも魔女の仕業ではないかといった様子である。それを聞いていたゆうじもまた別のところに着いていた赤いしみを見つけて、「あ！ここにもかいてある～」と言う。二人のやりとりに気づいた子どもが集まってくる。くるみは「きっとな～まじょがえのぐでここにぺたぺたはった…」。まこは的を指差して「こんなかにまじょがはいってるん？」。まさしは「これ（的）まじょがばけてるんちゃう？」と言って、新聞棒で的を叩き的と的の音の違いを確かめている。はるおは「あかいろ～」と叫んでいる。くるみは、筆者に、

「これはまじょのしわざや～」と言いに来る。すると、まさしはグラウンドの横に生えている赤い葉の木を見つけて「きのうな、あれ、みどりやったのに、あかにかわってる」と言い出す。不思議なことばかりで少し不安になってきたのか、りこが「もう、はやくおへやにかえりた～い」と言う。そうたは、水ヨーヨー風船のかけらを見つけて、「こんなんおちてた～」とみんなに伝えると、まさしが「そのヨーヨーが、まじょばけてるんちゃ～ん（ばけているのじゃない）？」と応える。保育者が「それ（ヨーヨー）まじょかもしれへんねんて～」と言った瞬間、子どもは「キャー！」と言って、ヨーヨーから逃げるようにその場から離れる。まこが「まじょはたんだいにおるんちゃう？」と言う。はるおは、グラウンドの端を指差して、「あ～！あそこ、はっぱない～！まえ、あったのに～」と興奮している⑤。子どもの会話を聞いていた保育者は、獲物を捕まえて早く帰ろうと言って、的あてを再開する。らいおんグループの的が倒れないことに気づいた保育者は、「たいへんや！らおいんがまだつかまえられへんやって～」と全員に聞こえるように言う。すると、他のグループの子どもはらいおんグループのところに集まってきて、「いっしょにみんなでやろう！」と言い、全員でらいおんグループの的を倒す⑥。的あてが終わると、その的（獲物）を持って帰ることにする。この時、的を持って帰ろうとするみすずは、新聞棒を友だちに持ってもらうようお願いをする。するとしょうがさっとみすずの新聞棒を持ってやる。そのやりとりをみていたのか、的を持っていない子どもが、的を持っている子どものところへ行き、「もったる～」と言って、新聞棒を持ってあげる。的を待つ子どもと新聞棒を持つ子どもとに分かれ、役割分担が行われた⑦。保育園へ帰る途中、草や花、ゴミをみつけては、「これもすーぷにいれよう」と言って、持って帰る。そして、保育園の前にある自転車置き場に獲物（的や草、花、ごみなど）を置いていくことにする。その時、みかが、獲物の前で新聞棒をクルクルと回しながら、なにかぶつぶつと言っている。筆者が、「なんていうたん？」とみかに聞くと、「あのな～これ（獲物）がな～ほんまもののな～えものになるように～って」と応える⑧。ここで実践が終了する。

（考察・解釈）

①⑧ごっこの世界だけれども、現実も認識しているので、このようなことばを発したのだろう。本当は段ボールだけれども、今はまじょごっこをしているから猛獣ということにしておこうという姿として捉えた。

②虚構の世界に入り込めないでいるような様子であった。

③子どもだけで順番交代やルールを決めている。

④順番交代というルールがなくなったことで1人あたりの投げる回数が増えるという方法を見つけ出した。この時の子どもは、1人ずつ投げる時と比べみんなで一緒に投げることが嬉しいという様子である。

⑤ごっこの世界では、すべての事象が不思議な世界になるようである。

⑥最後はクラス全員で一緒にやろうとする子どもの姿があった。

⑦集団のなかでの自分の役割を見つけ、それを果たそうとする姿が見られた。他者に頼ることができ、頼られることで自分の存在を確かめているようにも見える。

【4歳児における動作の変容】

この時、観察可能であった子どもの投動作は以下のとおりである。

だいき：左足前右手投げ⇒休み

あゆか：右足前右手投げ⇒右足前右手投げ

しゅんや：右足前右手投げ⇒右足前右手投げ

そうた：右足前右手投げ→左足前右手投げで投げる前に3回、投げるふりをしてから投げる→右足前右手投げで投げる前に3回、投げるふりをしてから投げる⇒右足前右手投げ

まさし：左足前右手投げ→両手で新聞棒を持ち挙げるようにして、上から投げる⇒左足前右手投げ

まこ：左足前右手投げ（上から抱えるように持つのではなく、手を下ろした状態で横から投げる）→左足前両手で新聞棒を持ち、胸の辺りから突き出すように投げる。→左足前右横投げ→左足前右投げ⇒両足揃え胸から突き出し投げ→両足両手で持って右に少しひねりを加えて突き出し投げ

はるお：左足前右手投げ→左足前横投げ⇒左足前横投げ

ゆうじ：右足前右手投げ→右足前左手投げ→左足前右手投げ（その時、左手は新聞棒を支えるように握っている）⇒右足前左手投げ（右手は新聞棒を支えるように握っている）→両足右手投げ→右足前右手投げ

くるみ：右足前右手投げ→右足前左手投げ→右足前右

手投げ⇒左足前右手投げ→両足左手投げ→右足右手投げ
りゅうじ：右足前左手投げ⇒右足前左手投げ
みすず：右足前右手投げ⇒歩きながら右横投げ→両足右手投げ
なな：右足前右手投げ⇒右足前右手投げ
しょう：左足前右手投げ⇒左足前右手投げ
みか：左足前右手投げ⇒左足前右手（両手）投げ（構えた時、棒を持ち替える姿がみられた）
りこ：右足前右手投げ⇒右足前右手投げ→左足前右手投げ
なみ：休み⇒両足右突き出し投げ
ゆういち：左足前右横投げ⇒休み
ゆうな：休み⇒休み

4歳児の投動作の変容を見ると、特にゆうじやくるみは利き手が決まっていないのか、右手で投げたり左手で投げたりしていた。また、手と逆側の足を前に出して投げたり、手と同側の足を前に出して投げたりするなど、いろいろな投げ方を試している様子が見られた。そうたのように、投げるふり（イメージトレーニングのようにも見える）を数回行ってから投げる姿も見られた。さらに、みかが行った、投げる寸前に持ち方を替える姿も見られた。このように、投げ方や新聞棒の持ち方をいろいろと工夫しながら、試してみては、また違う方法で行うといった様子が観察された。4歳児は、行為の仕方を変えながら、経験に基づいて成熟した動作へと変化していくと考えられる。もちろん、投げ方が変わることなく、安定した投動作を行う子どもも多く存在した。特に、りゅうじやまさし、だいき、しょうらは、宮丸の投動作のパターン分類ではほぼ成熟型（パターン5）の投動作[14]を行っているおり、投げ方は安定し、力強さが感じられた。右足前右手投げであったそうたやしゅんじ、あゆからは、パターン4にあたる。これは、投げる手と同側の足を前に出して投げるのが特徴である。投動作は経験による影響が大きいと言われていることからも、投げるあそびを存分に味わわせたいものである。

4．総合的考察

4.1. 言動のやりとり

3歳児および4歳児の事例検討および考察を踏まえて、各年齢の発達的特徴を整理したい。まず、3歳児と4歳児に共通する点として、第一に具体的な対象物がある場合、見立てあそびという行動が行われていたことである。本研究であつかった新聞棒は長細い形をしていたため、杖やほうき等に見立てられていた。第二に、ごっこあそびのなかで、現実の世界と虚構の世界とを行き来しながら、イメージを膨らませていたという点である。第三に、ごっこの世界に入り込んでいた子どもは、集団で熱中してあそぶ姿があったということである。

次に、4歳児が3歳児に比べて、顕著に異なっていたと考えられる特徴を整理する。大きな特徴としては、4歳児は子どもたちだけで順番交代やルールを決めたり、既存のルールを作り変えて、違うあそびを創造したりしていたという点である。またそれを、友だちに提案するという主体的な活動になっていたことがわかった。もう一点は、集団を意識していると思われる姿が多く見られたことである。子どもの発話に「みんなで」や「いっしょに」というものが多く観察された。新聞棒づくりの場面においても、子ども同士のなかで「たすけて」とか「おしえたるわ」ということばが多く使用されていた。すべての子どもの声を録音することができなかったので、3歳児においても、そういう会話が行われていた可能性はあるかもしれない。それは今後の課題にする。

4.2. 動作の変容

3歳児と4歳児の比較を行ったところ、4歳児においては、投げ方や持ち方を変化させ、いろいろな仕方を試みているのが特徴的であった。身体各部を意識しながら、自分のイメージどおりに身体を自在に動かしているようにも見えた。「～しながら～する」という活動が確かな力となりつつある時期だからこそ、腕を後方に引いて体重を移動させながら新聞棒を投げるという行為が可能になると考えられる。そして、身体各部を協調させて投動作という一つの形にまとめ上げ、さらにそのなかで、力をこめたりすることができるのが4歳児の特徴と言える。一方で、やりたいことには何度も繰り返し挑戦するが、できないことがわかるとやらない姿が現れてくるのも4歳児である。二つの思いで揺れる子どもだからこそ、できそうだと子どもが思える課題でなければならない。例えば、子どもが投げても届きそうもないところに的があれば、やらない子どもが出てくるだろう。これぐらいの距離ならできる、もしくはできるかもしれないという場所を見つけ

ることが必要である。もちろん、4歳児とはいえ、生活のすべてのことが1人でできるわけではない段階なので、保育者による励ましのことばや友だちの存在が支えになるのである。投動作は経験による影響が大きいと言われていることからも、投げるあそびを存分に味わわせたいものである。

最後に、本実践は新聞棒に限定して行ったが、他のものを用いた場合では、また違う変化があるかもしれない。それは、今後の課題としたい。

（しおた　ももこ　本学非常勤講師）

【注】

1　秋葉英則、1992年、『発達心理学概説（上）』p137、清風堂書店

2　丹下保夫、1980年、『新体育学体系第4巻体育原理（下）』、pp.60-61、逍遙書院。

3　より効果的な学習を引き出せる時期という意。（学校体育研究同志会編、1999、『乳幼児の体育あそび』p37、草土文化参照。）

4　ボールを投げる能力を指す。発育発達の観点から投能力を調べた研究において、最も広く用いられてきたのは硬式テニスボールよる遠投能力である。

5　①メンコあそび、②紙・ストロー飛行機あそび、③新聞棒を用いた的あてあそび、④小麦粉粘土を用いた的あてあそび。

6　メンコあそびと紙・ストロー飛行機がここに分類される。

7　新聞棒を用いた的あてあそびと小麦粉粘土を用いた的あてあそびがここに分類される。

8　ごっことは「想像による虚構のあそび」と捉える。（高浜介二ら監修、1984、『4歳児の保育』、あゆみ出版）

9　エルマーとは、絵本『エルマーのぼうけん』の主人公であり、当時この絵本が子どもたちに人気であった。

10　的には表面と裏面にそれぞれ同じ絵が描かれているが、色の違いがあり、例えばくまの絵の場合、一方は水色をベースに塗り、もう一方は緑色をベースに塗っている。

11　本研究を行う以前に、しっぽとりあそびを行った際、「しっぽマン」という架空の人物が登場した。以来、筆者が、保育園へ手作りおもちゃを持って行く時は、「しっぽマン」からの贈り物という設定で渡していた。「しっぽマン」は保育園の隣に位置する短大の体育館に住んでおり、筆者とは友だちということで子どもは理解している。

12　本実践が行われる約1カ月前に、遠投距離の調査で同じ段ボールを使用している。

13　ホワイトボードには本実践には全く関係のないことが書かれていた。

14　宮丸のボールを用いた投動作パターンは6パターンある。パターン5は右足から左足（左足から右足）への体重移動、腰の回転が行われることが特徴である。

【引用文献】

・秋葉英則、1992年、『発達心理学概説（上）』p137、清風堂書店。
・丹下保夫、1980年、『新体育学体系第4巻体育原理（下）』、pp.60-61、逍遙書院。

【参考文献】

・大阪保育研究所、1984、『年齢別保育講座　3歳児の保育』、あゆみ出版。
・大阪保育研究所、1984、『年齢別保育講座　4歳児の保育』、あゆみ出版。
・大阪保育研究所、1984、『年齢別保育講座　5歳児の保育』、あゆみ出版。
・田中昌人、田中杉枝、1986、『子どもの発達と診断　4　幼児期』、大月書店。
・田中昌人、田中杉枝、1988、『子どもの発達と診断　5　幼児期』、大月書店。
・学校体育研究同志会大阪支部、1990、『幼児の運動文化論』、あいわ出版。
・学校体育研究同志会、1999、『乳幼児の体育あそび』、草土文化。
・心理科学研究会、2000、『育ちあう乳幼児心理学』、有斐閣。

A Developmental Study of Young Children's Physical Play of Throwing Motions

Momoko Shiota*

Summary

To teach the science of continuity and development of sports culture in early childhood, we must choose teaching materials which are written in accordance with the process of development, and inquire into the contents very carefully. In order to obtain some hints, I have tried some practice of amusing children with throwing exercise. This thesis is to clarify the characteristics of development stage in order of age through the children's speech and actions. The test was conducted on the 3-year-old and 4-year-old children. The reason why I chose throwing exercise is that throwing needs intentional study to make progress, which is different from running and jumping exercises. Analyzing method is that playing the video tape of recording the observation of children of each age for two days, I wrote down and recorded the speech and actions of the children. After that, I extracted the characteristics of the speech and actions of each age.

As a result, I have found that speech action was more active, and throwing abilities were more diversified, compared 4-year-old children with 3-year-old.

Keywords : throwing exercise, sportive play, sports culture, development

*Osaka College of Social Health and Welfare
〒590-0014 8-2 Tadei-cho, Sakaik-ku, Sakai City, Osaka
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Child Care and Education
e-mail: m.shiota@kenko-fukushi.ac.jp